

499 夫婦間リンパ球混合培養遮断抗体
(MLR Blocking Antibody, MLR-BA) に対応
する絨毛細胞膜抗原に関する解析

新潟大学

後藤重則, 高桑好一, 長谷川功, 梶野 徹,
金沢浩二, 竹内正七

【目的】夫の B リンパ球表面抗原に向けられている MLR-BA は妊娠の免疫的維持機構に重要なかわり合いを持つとされている。この MLR-BA が母児間の接点をなす絨毛細胞に対して直接的にどのような免疫的反応を示すかを解析した。【方法】15 例の満期胎盤より Smith らの方法により絨毛細胞膜成分 (Placental Plasma Membrane Vesicle, PMV) を抽出し、同時にその児リンパ球の HLA タイピングを行った。①母体血清を自己の PMV により 24 時間吸収し、吸収前後の MLR-BA 活性 $[=(1-\text{被検血清添加 MLR(cpm)}/\text{対照血清添加 MLR(cpm)}) \times 100\%]$ を測定した。また他人の PMV によっても吸収し、MLR-BA 活性の変化と HLA の共通性について検討した。②夫リンパ球の代わりに PMV を用いてリンパ球と混合培養を行い反応を測定し、MLR の場合と同様に、自己母体血清にこの反応を抑制する抗体活性が存在するか否かを検討した。また他人母体血清の抑制活性および HLA の共通性についても検討した。【成績】① MLR-BA 活性は自己の PMV による吸収で全例が有意に低下し、他人の PMV では 15 例中 2 例を除いて MLR-BA 活性は変化せず、allospecific な吸収効果が認められた。②リンパ球は PMV との混合培養において有意の反応を示し、この反応は自己母体血清で全例が抑制された (抑制活性 $=60.9 \pm 19.0\%$)。他人母体血清では 15 例中 5 例のみしか抑制されず (抑制活性 $=32.7 \pm 37.9\%$)、allospecific な抑制効果が認められた。【結論】絨毛細胞膜には MLR-BA に対応するアロ抗原が存在することを観察し、母体血清中の抗体がこのアロ抗原に対して免疫的遮断作用をもつ可能性を指摘した。

500 胎盤後血リンパ球の機能について
—末梢血リンパ球との対比において—

京都大学医学部婦人科学産科学教室

吉田益美, 神崎秀陽, 佐藤重恭, 徳重 誠,
王 輝生, 森 崇英

【目的】同種移植の成功例といえる妊娠には全身的、局所的に種々の免疫学的因子が働いていると考えられ、今回我々は母児間の接点の絨毛間腔の血液のリンパ球に免疫抑制機構が存在するかを検討した。

【方法】正期産の児分娩、胎盤剥離後の胎盤後血を採取し、対照として同一妊婦の末梢血を用い、双方を比重遠心法にてリンパ球を分離した (各々を RPL, PBL と略す)。いずれのリンパ球もトリパングルによる検定で 98% 以上の viability を示した。両者の PHA, Con A に対する増殖反応、臍帯血、第三者リンパ球を stimulator (Cm, Vm) とした one-way MLR, モノクローナル抗体 (mAb) (OK シリーズ) で T cell subset の分析を行った。リンパ球の rIL-2 (シオノギ) 添加による増殖反応を検討し、抗 IL-2 レセプター (IL-2R) (mAb) を用いて IL-2R の測定を行った。

【成績】PHA, Con A 反応では RPL は PBL と比較して有意に低反応を示し、one-way MLR でも同様の結果を得た。T cell subset の分析では RPL は $CD3^+$, $CD4^+$ 細胞優位で、 $CD8^+$ 細胞は PBL に比しより少なかった。これにより mitogen 反応と MLR にみられた RPL の低反応は subset の差やリンパ球の viability の差ではなく、T cell 機能を反映していると考えられる。rIL-2 によるリンパ球増殖反応では RPL は有意に低い反応を示し、抗 IL-2R 抗体を用いた IL-2R 測定では RPL の方が IL-2R 発現が少なかった。

【結論】母児間の接点のリンパ球に IL-2R の発現が少ないことは局所性免疫抑制機構に貢献していると考えられる。